

【選択】日本史研究の最前線

- ◆期日 平成29年8月7日(月)～8月9日(水) 9:00～17:00(予定)
- ◆時間数 18時間
- ◆主な対象 中学校・高等学校地歴科教諭
- ◆定員 40名
- ◆会場 渋谷キャンパス
- ◆応募期間(仮申込) 平成29年4月17日(月)10:00～同4月18日(火)23:59
- ◆受講料 2万円
- ◆講習内容

現在の日本史学界では、どのようなことが問題とされ、いかなる解決策が提示されているのでしょうか。本講習では、日本史(古代史・中世史・近世史・近現代史)のみならず、隣接する考古学や外国史(中国史)の講座も用意し、教科書の内容に即して、多角的な視点から日本史研究の最新の動向を紹介します。また講習にあたっては、考え(学説)の根拠となる史資料(文献史料・考古資料など)の扱いにも留意します。

◆担当講師 ※時間割順

谷口 康浩 國學院大學文学部教授 ※講師変更(平成29年5月)

佐藤 長門 國學院大學文学部教授

矢部 健太郎 國學院大學文学部教授

吉岡 孝 國學院大學文学部教授

樋口 秀実 國學院大學文学部教授

金子 修一 國學院大學文学部教授

◆シラバス ※時間割順

講義名	部族社会から首長制社会へ—先史社会の考古学—
担当講師	谷口 康浩
講義概要	<p>考古学の発掘調査・研究の進展によって、先史時代の新たな事実が次々と明らかとなり、歴史的評価の見直しが進められている。社会考古学の面では、縄文時代の狩猟・採集民社会から律令国家の形成にいたるまでの長い歴史的過程を、豊富な出土資料に基づいて実証的に検討できるようになってきた。中国や西アジアに比べて文字使用の普及も都市・国家の形成も遅れた日本だが、人間社会の悠久の歴史を考古学によってこれほど綿密に研究できる地域は世界的にも稀であり、緻密な研究成果に注目が集まっている。</p> <p>この講義では、縄文時代の東日本地域に発達した分節的な部族社会、および初期国家への胎動が始まった弥生時代末から古墳時代初頭の首長制社会を取り上げ、先史時代の社会を考古資料からどのように復元できるか、また社会構造が複雑化していく過程と要因について考古学的にどのように説明できるのかを、具体的な資料を用いて解説したい。講義のポイントは、二つの時代の社会の組織原理や政治的関係を対比的に考えることであり、あわせてそれを語るための資料と考古学の研究方法を理解してもらうことである。</p>

	授業の内容 1) 講義「縄文時代の部族社会と階層化」 2) 講義「邪馬台国時代の王権とイデオロギー」
評価方法	講義の最後 15～20 分で確認テストを行います。

講義名	古代の権力構造—天皇と氏族の相克—
担当講師	佐藤 長門
講義概要	<p>戦前・戦中の反省から、戦後の日本史教育では天皇（大王）を極力排除し、氏族中心の歴史叙述がおこなわれてきました。その傾向はいまでもあまり変わっていないのですが、好むと好まざるとにかかわらず、政治の中心に天皇が君臨していた日本古代において、その存在を無視することは逆に歴史を歪めてしまうことになりかねません。本講座では以上の観点にもとづき、日本古代の権力構造についてニュートラルな立場から検討してみたいと考えています。その際、時間的な制約もありますので、論点を以下の3つにしぼり、それぞれ最新の研究動向を紹介していくつもりです。</p> <p>i) “聖徳太子”の虚像と実像—6・7世紀の王位継承— ii) 長屋王の変はなぜ起こったか—光明子立后問題との関係— iii) 王統迭立と承和の変—他氏排斥事件の実態—</p>
評価方法	講義の最後 15～20 分で確認テストを行います。

講義名	史料で読み解く 中近世移行期
担当講師	矢部 健太郎
講義概要	<p>日本史の教科書では、戦国時代までを中世、信長・秀吉の織豊期からを近世とするのが一般的です。では、何が中世的な特徴で、何が近世的な特徴なのでしょう。そもそも、当時の人々は、そこに大きな時代の隔たりを感じていたのでしょうか。限られた時間ではありますが、中世と近世の移行期である織豊期を中心に、従来の研究動向や問題点を把握しつつ、最新の研究状況について考えてみたいと思います。以下、大きく三つのポイントを提示しておきます。</p> <p>(1) 足利将軍家の家格と朝廷 中世武家権力の特徴の一つは、鎌倉・室町と続いた「源氏将軍」の系譜にあります。しかし、頼朝以来の鎌倉幕府と尊氏以降の室町幕府とでは、「将軍家」の家格に大きな隔たりがありました。足利将軍家は、自らの家格をどのように位置づけようとしていたのか、公家社会との関係から考察します。</p> <p>(2) 豊臣政権の大名支配—「五大老」とは何か— 豊臣政権については、新たな論点が多数提出されています。果たして秀吉はどのような政権構想をもっていたのか、それはなぜ破綻したのか。いわゆる急場しのぎの「五大老」制創出という説明の妥当性について、一次史料に基づき検証します。その過程に大きな影響を与えた「秀次事件」を一つの画期として、再検討してみたいと思います。</p> <p>(3) 豊臣政権末期の状況と「秀次事件」 秀吉の大名支配秩序は、晩年の「秀次事件」を画期に大きく動揺します。この重大事</p>

	件は、十分な検討もないまま「毫碌した秀吉が秀次を切腹させた」と説明されてきました。関白世襲という途を選んだ豊臣宗家の自己否定にも見えるこの事件について再検討を試みます。
評価方法	講義の最後 15～20 分で確認テストを行います。

講義名	江戸時代の国際環境と民衆生活
担当講師	吉岡 孝
講義概要	本講義では二つの点を中心にお話しをしようと思います。①江戸時代の国際環境。近年ではこれを鎖国という言葉で説明することは少なくなりました。琉球とアイヌなどを含めた東アジア諸国との密接な関係がクローズアップされています。従来西洋諸国との関係を中心に構成されていた対外関係史ですが、ここでは東アジア・ロシアを中心にお話しする予定です。②江戸時代の民衆生活。近年では露骨な貧農史観から民衆生活を説明することは多くはなくなりましたが、では具体的に民衆生活の豊かさを描けばいいのでしょうか。ここでは具体的な絵や史料の原本等を用いて民衆生活の実像を描きたいと思います。
評価方法	講義の最後 15～20 分で、確認テストを行います。

講義名	近代日本外交史研究の最前線
担当講師	樋口 秀実
講義概要	<p>近年、高等学校の歴史教育において、世界史とともに日本史を必修化しようとする動きがみられます。また、最近の世界史の教科書は、かつてのものに比べ、日本の動きに関する記述が増えました。現在は、歴史を学習するうえで、世界史のなかの出来事と日本史のなかの出来事とを重ね合わせて考察する能力が求められています。世界史の潮流に日本はどのように対応したのかを考察する能力を養うことは、いわゆるグローバル社会のなかで活躍する日本人を育成することにつながりましょう。また、近年の「観光立国」をめざす動きのなかで、世界にむけて日本の歴史・伝統・文化を発信かつ伝達することは、非常に重要な要素となりましょう。</p> <p>そうしたなか、国際社会との関わりが一段と濃密になったのが、近代以降の日本です。専門的な歴史研究においても、近代日本における歴史的な事象は、「世界史のなかの〇〇」として分析されるケースが多いです。近年、日本外交史研究の分野では、日本語の史料のみならず、外国語の史料も渉猟し、多角的に分析した成果が続出しています。これは、日本人が海外に行く機会が多くなったこと、外国、とくにアジア諸国の史料公開状況がよくなったことに起因しています。その結果、日中戦争やアジア・太平洋戦争の開戦原因究明を最重要視する従来の視点に束縛されない、多角的視点からの「世界史のなかの日本史」像が生まれてきています。</p> <p>この講義では、以上のような新たな研究傾向を踏まえ、従来の歴史像からの修正が大きくなった辛亥革命と韓国併合という、日本とのかかわりが深い2つの国際的事件をとりあげ、近年の研究成果を詳しく説明していきたいと思います。この2つの事件は、それぞれの事件が起こってから約100年が経過し、その百周年を記念して、2010年代に日本を含めた世界各地で国際記念シンポジウムが開かれ、論文集などの刊行も相次ぎ、飛躍的に研究が進展しました。そうした新しい研究成果を、日本とのかかわ</p>

	りを踏まえながら、この講義で紹介していくつもりです。
評価方法	講義の最後 15 分～20 分程度で確認テストを行います

講義名	日本史研究の最前線、世界史上の日本 ―外からの視点―
担当講師	金子 修一
講義概要	<p>現在、東アジア世界における日本歴史の展開という考え方は常識となり、「東アジア世界」「冊封体制」という術語は教科書でも用いられている。だが、東アジア世界の範囲、冊封の定義ということになると、実は十分に論証されていない種々の問題を残している。他方、従来は日本独自の国風文化の発展する時代と言われてきた10世紀以後の日本についても、遣唐使のような王朝主体の外交に代わる形で、民間の海上交易の発展を背景に活発な交渉の続いていたことが明らかになった。以上のことから、本講義では初めに「東アジア世界」「冊封体制」に関わる諸問題について述べ、その後で東アジア世界の観点から見た日中交流の特質について、できるだけ長い時代にわたって検討してみたい。</p> <p>参考書 李成市『東アジア文化圏の形成』山川出版社世界史リブレット、2000年 堀敏一『東アジア世界の歴史』講談社学術文庫、2008年 鈴木靖民・金子修一・田中史生・李成市編 『古代交流史入門』勉誠出版、2017年</p>
評価方法	<p>講義の最後 15～20 分で確認テストを行います。</p> <p>自分の理解した授業の内容を的確に表現できるか。日頃の自身の授業との関連について考察し、それを表現できるか。</p>